

# 多文化共生に向けた異文化コミュニケーショントレーニング (ICT) の試み — 改変版 Outside Expert の実践と参加者の学び —

伊藤 明美

## 1. はじめに

多文化共生とは、多文化主義をベースとして人種、民族、宗教、ジェンダーあるいは性的指向や言語など、社会・文化的に一定の意味のまとまりをもつ集団が、互いの違いを尊重しあいながらともに生きていくことである。日本でも、グローバル化にともなう激しい人の移動や、潜在的には存在していた多様な文化集団の顕在化などによって、2006年には、総務省がややあいまいながらも多文化共生について一定の考え方を示している<sup>1</sup>。また、社会における異文化集団の共生は、一般に社会的少数派と主流派の問題、すなわちパワーバランスの偏りや社会的階級に根差した偏見あるいは差別などの課題と深く関連する。多文化共生とは、人や地域、政治などがこうした課題にどう向き合うかが具体的に問われる概念であるといえるだろう。

一方、多文化共生の背後にあるこうした社会的課題は、人権トレーニングや多様性トレーニングなどの分野ではカバーされても、異文化コミュニケーショントレーニング（以後、ICT と呼ぶ）<sup>2</sup> では、明確に取り上げら

---

1 総務省（2006）によれば、多文化共生とは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」である。

2 異文化コミュニケーショントレーニング（Intercultural Communication Training：ICT）は、時にクロス・カルチュラルトレーニング（Cross-cultural Training：CCT）と称されることもある。しかし、Brislin & Yoshida（1994）によれば、文化適応の問題は異文化環境における実際のコミュニケーションを抜きに考えることができず、また、人々の異文化コミュニケーションへの態度、技術と密接に関連する。本論がICTを用いるのはそうした理由を踏まえてのことである。

れることが少なかった。しかし、異文化コミュニケーション研究がアメリカで始まり、公民権運動や女性解放運動の影響を受けながら確立していったことを考えれば、ICTは偏見や差別からの解放をめざした多文化共生のためのコミュニケーショントレーニングでもあったはずである。異文化コミュニケーションで常に重要視される「他者への敬意」とは、パワーバランスの偏りから決して解放されることのない社会構造の中で生じる安易なステレオタイプや偏見への深い「気づき (awareness)」が必要だからである。

Outside Expertは、こうした多文化共生の視点が盛り込まれたトレーニングである。これは、もともとPedersen (2000)によって開発された心理カウンセラー向けのトレーニングであったが、筆者はそれを多文化共生のためのICTと位置付けて、10年以上にわたり活用してきた。本論では、そうした実践経験を反映させながら、日本の異文化コミュニケーション初学者向けに修正を加えた「改変版」Outside Expertの特徴と、その参加者の学びを分析し、このトレーニングの意義について考察していきたい。

## 2. 異文化コミュニケーション教育としての Outside Expert

### 2.1 異文化コミュニケーショントレーニング (ICT) について

ICTは、その名が示す通り、異文化コミュニケーション研究と共に発展してきた。具体的には第二次世界大戦後に世界の超大国となったアメリカが、国内外の異なる文化をもつ人々とより効果的で良好なコミュニケーションを行うことを助けるためのプログラムとして発展させてきたのである。トレーニングの大きな特徴は、参加者が特定のコミュニケーション・スキルを学ぶというより、むしろ、「学び方を学ぶ (‘learn how to learn’)」ようにうながされるということである。そうした意味でICTは、たとえばワードやエクセルの使い方を学ぶようなトレーニングと決定的に異なる。

異文化間のコミュニケーションで生じる異文化摩擦の問題に対応するた

めには、その時々コミュニケーション文脈を構成する多様な要素と、それらが織りなす複雑な独自性を理解する必要がある。表面的には同じに見える現象であっても、相手の社会的立場やジェンダー、政治的背景、異なる自他感情、アイデンティティ問題などを考慮すれば、その解釈は全く異なることもある。異文化間のコミュニケーションに知識の丸暗記は通用しない。ICTが「学び方を学ぶ」という目標を掲げるのは、コミュニケーションのたびに、柔軟に「学びなおしながら」、むしろアナログなコミュニケーション技術を磨いていくことのできる人々を養成したいからである。

また、良く知られたトレーニング方法には、(1)知識伝達、(2)仮想学習（疑似体験型）、(3)体験の3種がある。知識伝達はICTの萌芽期に中心的であった「大学モデル」といわれる方法で、テキストや視覚教材を利用して知識の伝授が行われるトレーニングである。また、海外に支社をもつような企業や、留学制度をもつ教育機関が、派遣社員や学生のために行う単発あるいは数回をみのプログラムは、時間的制約から仮想学習に比重がおかれることが多い。仮想学習には、ケース・スタディやカルチャー・アシミレーター（culture assimilator）などを用いてワークショップ形式で異文化摩擦の実態やその解決方法を学ぶものと、ロールプレイやシュミレーションのように、参加者が特定の役割を演じて、自らの感情変化や異文化問題への対応を経験する疑似体験型のものがある。また、最後にあげた体験学習とは、(短期)語学研修やスタディツアー、海外でのインターンなどに代表される、実際の体験を通したトレーニングのことである。

Mendenhallら（2004）は1988年から2000年に発表された英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語によるすべてのICT研究を精査し、最も利用頻度が高かったのは、仮想学習の一つであるカルチャー・アシミレーターであったと報告している。日本語では「文化的帰属訓練法」とも称されるこのトレーニングでは、異文化における危機的状況（critical incident）がエピソードの形で呈示され、その後、用意された4つの選択

肢をもとに誤解や摩擦の原因について検討が行われる。参加者は自ら選んだ答えとその理由について他のメンバーとともに話し合い、正答にたどり着くまでディスカッションを繰り返すのである。そうしたプロセスを辿ることによって、対象となる文化のみならず自文化の理解が深まる仕組みである。また、グループが文化的に多様なメンバーで構成される場合は、そのトレーニング効果が一層高まると考えられている。カルチャー・アシミレーターの利用が多いのは、他と比べて実施時間が短いこと、場所を選ばないこと、そして特殊なキットが不要であることなどが影響しているからであろう。

一方、ICTを必要とするいかなる組織・企業においても、一般的にはトレーニングのための十分な時間が保障されているわけではない。それは、指導者やファシリテーターが採用するアプローチにも少なからぬ制限をくわえ、特に異文化コミュニケーションの理論や知識をどう伝授するかは悩ましい問題となる。場合によっては知識伝達の時間を割愛するファシリテーターもいるようだ。しかし、Wallace (1993, p.12) は、The School for International Training (SIT)<sup>3</sup>での長い教育経験にもとづいて、人が体験を効果的に解釈するためには、事前に構築された知的なフレームワークが必要だと述べる。異文化摩擦の経験は、一般に感情から切り離せないものである可能性は高く、その対応には、むしろ知識という客観的材料が必要ということであろう。

また、やや異なる視点ながら Brislin & Yoshida (1994, p.26) も、ICTプログラムにおける知識伝達の重要性を示唆する。参加者のニーズアセスメントを踏まえて、①気づき → ②知識 → ③感情 → ④技術の4段階でトレーニングが行われるべきとしたのである。感情制御の方法や具体的なコミュニケーション技術を磨く前に、知識の獲得が必要であること

---

3 SITは体験学習を教育カリキュラムの中枢に据えて異文化コミュニケーションやTESOLの専門教育を行うアメリカバージニア州にある大学院大学

が示された形である。十分な知的刺激の事前インプットとそれらの理解は、異文化摩擦に直面したときに陥りやすいコミュニケーターの感情的態度を緩和し、その後の技術向上をうながす可能性がある。

ICT 研究とその実践は、関連分野の研究や地球社会の動きに影響されながら、知識重視から自己に対する気づき重視、そして体験重視型へと発展してきたともいわれる（町，1995）。実際には、知識、気づき、そして体験がスパイラルに展開するような ICT プログラムが必要なのであろう。たとえば、前述のカルチャー・アシミレーターなどは、外国から帰国した後に再度行うことで、自他文化への理解がより深まることがわかっている。十分な時間をかけて知識を蓄積しつつ、（疑似）体験のチャンスが適宜与えられるようなプログラム構成が望ましいといえる。したがって、前述した3つのタイプのトレーニングアプローチも、それぞれが独立して機能するのではなく、むしろ、相互補完的なものとして考えるのが無難である。

## 2.2 疑似体験型の仮想学習について

本論が扱う Outside Expert のような疑似体験型の仮想学習は、ファシリテーター向けの研修機会が提供される機会も多く、実践者が比較的多い。中でも、カードと非言語行為を使って異文化摩擦を学ぶ Barnga（バーンガ）、参加者を  $\alpha$  と  $\beta$  という2つの架空の文化集団に分けて異文化コミュニケーションの諸問題について学ぶ BaFáBaFá（バファバファ）<sup>4</sup> は、利用頻度の高い疑似体験トレーニングである。その他、特殊なキットを使ったエコトノス（Ecotonos）、スターパワー（Star power）、アルバトロス（Albatross）などはよく知られている。

一般に疑似体験型の ICT は、参加者の感情と知性を同時に刺激して心理的な負荷を与え、自他文化に対する深い気づきとカルチャーショックへ

---

4 BaFáBaFá は、もともと Shirts（1973）によって米海軍の訓練として開発されたシュミレーションゲームである。

の備えがうながされるとされる。トレーニングのプロセスにおいて、参加者は、異文化環境の中で生じる困難な状況で、自分がどのような感情をもち、どのように対応するかを確認し、起こりえる現実の異文化コミュニケーションへの準備を整えるのである。疑似体験型 ICT が時に「予防接種的」トレーニングとされる理由は、まさにここにあるといえるだろう。

また、仮想学習型 ICT の目標として重要視されることの一つは、普段、意識されることの少ない主観文化とコミュニケーション行為の密接な関係について、参加者の気づきをうながすことである。主観文化とはこの場合、その存在は確実なのに、具体的に見たり触ったりすることができない内面的な精神文化のことである。森田（2000）は、文化を林檎の木にたとえて、芸術や言語、慣習、道具など、目に見えて具体性のあるものを果実としてあらわし、幹や根の部分には世界観や信仰、帰属感、集団的トラウマなど、人間の内面にあって、しかも行為や情動の基礎となる精神的な項目を挙げている。果実は客観文化、幹や根は主観文化である。

コミュニケーション上の摩擦や誤解、あるいはその解決方法にも主観文化は関与するが、そうした知識は、疑似体験型 ICT を通じて深まることになるだろう。異文化を意識せずとも日常のコミュニケーションが成り立つ人々や、外国での生活経験がない人々にとっては、特にその効果が期待されている。

一方、日本の教育現場においては、疑似体験型の ICT が幅広く支持を得ているとはいえない。疑似体験型トレーニングでは、ルールが参加者に徹底されていない、覚えるのに時間がかかるなどの問題点（森山，2011）が指摘される他、一般に日本人は疑似体験に不慣れであり、参加者は「恥ずかしさ」や「不快感」を感じるからである（八代他，1998）。日本人は、教師による知識伝達型教育環境の中で学習し、疑似体験は幼稚に感じられるのであろう。特に成人の場合は、疑似体験に深く自分自身を関与させていくことに困難を感じる参加者も少なくない。また、トレーニングの成功には、参加者の想像力や、パフォーマンスなどの活動への協力が求められ、

不慣れな参加者にはトレーニングそのものが苦痛に感じられるおそれすらある。

他方、長谷川（1993）は、大学で実施したICTのアンケート調査の結果から、大学生は疑似体験型トレーニングに抵抗がなく、むしろ興味をもって参加しているようだとする。この場合、対象者が異文化コミュニケーション論の受講者であり、また、実施時期を十分な知的学習の後においた<sup>5</sup>ことが、抵抗感の低減につながった可能性がある。しかも、講義とはいえ、短くはない時間をともに過ごすことによって、学生の間にも、また、学生と教師の間にも一定以上の rapport が形成されていたことであろう。疑似体験型のICT実施にあたっての rapport 形成は、末田（1994）も指摘するところであり、西洋諸国とは異なる学習文化をもつ日本人をトレーニング対象とする場合、それは疑似体験型トレーニングを成功させるための一つの重要な鍵概念であると思われる。

また、疑似体験型のICTでは、その実践に必要な時間の長さも課題の一つである。ブレーン・ストーミングなどに利用される手軽なものを除けば、トレーニングの多くは最低でも1時間、時には3時間程度をみなくてはならず、教育現場での利用にはさまざまな工夫が必要となる。トレーニングで使用する部屋についても、たとえば、Barnga（バーンガ）のように2つのグループに対して別々に説明をしなくてはならない場合、あまり離れていないところに教室を2部屋、あるいは十分な空きスペースのある教室1部屋を用意するということになるため、物理的環境が整わなければ実践は難しい。

### 2.3 オリジナル版 Outside Expert について

先述のように、Outside Expert は、心理カウンセラーのために開発さ

---

5 長谷川は、Barnga については実施前に20時間の事前学習をさせている。また、BaFáBaFáについては自身の異文化コミュニケーション論の既修者を対象とした。

れた Pedersen (2000) の疑似体験型トレーニングである。開発の背景には、アメリカなどの多文化社会で仕事をするカウンセラーやセラピストは、クライアントに内在する異なる文化システムに配慮し、それらに寄り添った聞き方、助言をすることが重要といった考え方がある。特に、カウンセラーが西洋文化を内化している場合、非西洋文化に無頓着であることが多く、たとえば、アジア、アフリカなどの文化を内化したクライアントへのカウンセリングでは効果が望めないばかりか、逆に負担を与えることすらあるという。Outside Expert はこうした状況にあるカウンセラーの非西洋文化への気づきをうながすためのトレーニングとして紹介されたのである。また、Pedersen は、一般的傾向としての「科学の西洋文化化」も指摘し、カウンセラーがよって立つ理論そのものにも西洋的な見方や思い込みがあるとして、カウンセリングにも文化交差的な視点を反映させることの必要を説いている。

こうした前提をもとに、Outside Expert は大きな意味において非西洋的価値観と接触したときのカウンセラーに驚きやストレスを体験させ、その対処法について考える機会を提供するトレーニングとなっている。特定の国や文化、あるいは民族などを対象としたトレーニングではないので、ICT として見る場合は「総合目的型」のトレーニングと位置付けることが可能である。

また、Outside Expert は参加者が「専門家」ないしは「架空文化集団の構成員」の役割を演じる、いわば「パフォーマンス型」のトレーニングであるが、実際に参加者に対して高いパフォーマンス力が求められることはない。カード、衣装などの小道具もいっさい必要とせず、ありのままの自分を自由に発揮することができる。具体的には、架空文化集団の構成員に課せられるたった2つのシンプルな「文化ルール」<sup>6</sup> だけが、パフォーマンスの要素である。そのため、一般にこうしたトレーニングにはありがちな「遊び（あるいはゲーム）感覚」は減少するようだ。

それぞれの文化集団に対して行われるトレーニングの事前説明も簡単平



易であり、参加者がゲームの進め方を理解していないなどの混乱が生じることはない。また、専門家の役割を担う参加者については、自身の行為や振る舞いを規制するルールは一つもなく、所要時間についても30分～40分程度とされ利便性が高い<sup>7</sup>。

また、Pedersen (2000, p.60) によれば、「振り返り」の時間に出される参加者の典型的なコメントは以下の通りである。

- ① 専門家が非言語行為を軽くみたこと
- ② 専門家はホスト文化を一貫性のないものとみたが、実はホスト文化からも同様にみられたこと
- ③ 専門家はホスト文化を否定的に見るが、ホスト文化の人々はむしろ自らの文化ルールにもとづいてホスピタリティを発揮したこと
- ④ 専門家によって収集された文化に関わるデータは、調査対象のホスト文化の人々より、むしろ、専門家にとって重要な事からであったこと

こうした参加者のコメントからは、Outside Expert が異文化コミュニケーション摩擦の本質にかかわる気づきを提供していることがわかる。すなわち、コミュニケーションにおける言語への高い依存と期待、異文化理解のためのストライクゾーンの見誤り、あるいは認識不足である。

一方、オリジナル版において「予防接種的」効果がより大きく期待されるのは、数的には圧倒的に少ない専門家集団である。架空の文化集団構成員となる大多数の参加者は、このトレーニングを通じて感情が揺さぶられるような経験をすることはない。むしろ、事前に「種明かし」をされる気

---

6 Pedersen は3つの文化ルールとしているが、そのうちの1つは架空の文化集団構成員が「はい」と「いいえ」でしか答えられないというものである。これは専門家集団にもあらかじめ知らせられるルールであり、むしろこのシュミレーション全体のゲームルールと考え、ここではあえて「2つの文化ルール」とした。その他、トレーニングの詳細についてはPedersen (2000) を参照されたい。

7 大学生を中心にトレーニングを実施してきた筆者の経験からは、50人を超える参加者を対象に一度に実施するなら80分～90分程度は必要である。

安さから遊び半分になってしまうこともありえる。大学生あるいは高校生などを対象とする時は、十分な注意が必要となるだろう。異文化摩擦の疑似体験は、参加者が自文化のフレームワークを利用して「自然に」振舞うことで、何らかのストレスを感じることができるよう設定が必要である。

ICTの多くはアメリカで開発されたものが多く、また、Pedersenが想定したオリジナル版 Outside Expertの対象者も西洋文化を内化したカウンセラーであったことを考えると、そのままでは高い効果が望めない。トレーニング対象が異なる場合は、できるだけ参加者の文化に配慮し、自然なふるまいを遮る可能性がある要因を排除する工夫が必要である。

## 2.4 改変版 Outside Expert について

ここでは、「改変版」Outside Expertの特徴を紹介する。改変にあたって想定した対象者は日本人の異文化コミュニケーション初学者であり、また、オリジナル版が目指す目標を残しつつ、多文化共生における社会的勢力格差をめぐる諸問題への気づきがうながされるよう配慮した。

パワーバランスの偏りは国内外を問わず社会のいたるところに見出される。一般に社会的多数派は少数派の考えや行為、その生活などに関心が薄く、時に自らの発言や行為が少数派を傷つけていることに気がつかないことも多い。改変版では、架空の文化集団構成員を規制する2つの文化ルールを修正することで、見知らぬ国（多くは開発途上国）に対する日本人の優越感を参加者が体験できるようにした。また、大学生の多くは日本国内における少数派の存在や、自分自身が多数派の一員であるという認識のない者が多い。多文化共生を目指すトレーニングには、多数派としての自分が少数派に対してどのようにふるまい、また、それはなぜかといったことに気づく必要があるだろう。

また、オリジナル版では専門家が架空文化集団を訪ねる設定になっているが、改変版では、逆に架空文化を演じる数人の参加者が専門家集団を訪ねる設定に変えている。数的に優位となる専門家集団は、それだけで架空

文化の構成員にストレスを与えることがあるほか、無意識に表出される優越感が架空文化集団の不安や怒り、無力感などを刺激することになる。要するに、現実社会における文化的少数派が抱えるストレスを架空文化集団の成員が体験できるような仕組みにしたのである。

パフォーマンスをとまなう疑似体験型 ICT では、一方の役割を演じる参加者にはあらかじめ「種があかさされる」ことが多く、体験をとおした学びのレベルはそうでない参加者より低くなる傾向が強い。改変版 Outside Expert では、上記のような設定の変更によって、役割によらずすべての参加者が高いレベルの気づきを得ることを目指した。

また、オリジナル版では架空文化に名前が与えられていない。ステレオタイプ形成や偏見を回避するため、特定の国や文化をイメージさせる状況を回避したかったのではないかと推測されるが、疑似体験のリアリティ・レベルをあげるためには、参加者の演じる役割に名前がついていることも重要である<sup>8</sup>。そこで、改変版では「文化-だ(ブンカ-ダ)」を逆に読んで「カンブーダ」とした。また、トレーニングの効果を期待して、参加者にカンブーダが架空文化であることを知らせるのは、トレーニングが終了してからとした。

#### 改変版 Outside Expert の特徴

カルチャーショックに対する備え
主観文化とコミュニケーション行為の密接な関係に対する認識の強化 実践の手軽さ
*より低いゲーム（遊び）感覚
*多文化共生視点の獲得
*役割に左右されない学び

\*は改変版で追加された特徴

---

8 八代他（1998）では、Pederson の了解を得て、架空文化を「バルーンバ」と命名している。

### 3. 参加者の属性とトレーニング前後の意識

トレーニングの対象は、2012年度「異文化コミュニケーション論 a」（前期）を経て「異文化コミュニケーション論 b」（後期）を受講した藤女子大学文学部の学生ならびに社会人の85人である。事前の知識学習を重要視したため、実施時期は後期終了直前の2013年1月であった。また、トレーニングの前後に簡単なアンケートに答えてもらった。自由記述部分については、文章に記された単・複の主要テーマを拾い上げ、それらを意味カテゴリーに分けて分析を行った。

#### 3.1 参加者のプロフィールとトレーニング前の意識

参加者85人のうち、16人が英語文化学科、10人が日本語・日本文学科、そして51人が文化総合学科の学生であった。また、2人は台湾と韓国からの留学生、そして2人が40代の聴講生であった。そのうち6人（7%）のみがICTの経験者で、残りの79人（93%）は未経験者であった。ICT経験者6人のうち2人は、台湾からの留学生と社会人であり、後者の経験は、高校生の交換留学を支援する組織でのことだったことから、日本人の大学生でICTを経験していた者は4人のみということになる。国際的な場面を想定した日本のコミュニケーション教育は、いぜん英語の語学訓練に偏ったものであることを示唆する結果であった。一方、海外経験のある者は36人（42%）にのぼった。しかし、そのうち22人は1～2週間の旅行を通じた経験であり、13人は2週間から3か月程度の短期語学留学であった。1年以上の長期滞在経験者は1人のみである。

また、現在、興味や関心をもっている地域について多肢選択法で聞いたところ、ヨーロッパと答えた者がもっとも多く50人（59%）、次にアジアで32人（38%）であった。「外国ならどこでも」と答えた者も33人（39%）みられた。一方、アフリカや中南米はそれぞれ7人（8%）と2人（2%）のみであった。こうした地域は旅行に出かけるにしても高額になりやすく、また、他の地域と比較して相対的に情報量が少ないこと、また、情報があっ

ても必ずしも肯定的とはいえないものが多いことが手伝って、学生たちにとっては馴染みにくく、興味・関心が高まらない可能性がある。アジア地域への高い関心は、おそらくその「裏返し現象」であろう。安価でバラエティに富んだアジア諸国へのツアー企画や、ドラマ・歌など、芸能をはじめとする多様な情報へのアクセス可能性が、参加者の関心を高めていると考えられる。実際、興味・関心を持つにいたったきっかけとして、テレビの娯楽番組やインターネットをあげた者が、それぞれ66人（78%）と35人（41%）であったことを考えると、海外への関心やその理解に果たすメディアの大きな役割を再認識させられる。

さらに興味・関心の内的動機としては、「教養や楽しみ」と答えた者が圧倒的に多く、77人（91%）であった。また、「話をしてみたい」など現地の人たちとの交流願望を示した者は50人（59%）である。人口の多い他の諸都市と比べ、札幌市は外国人居住者が相対的に少なく<sup>9</sup>、外国や外国文化への関心がいぜん表層的なものにとどまっている可能性が見てとれる結果である。

図 1

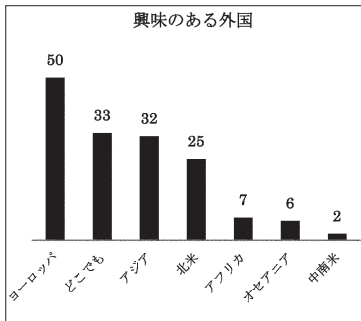
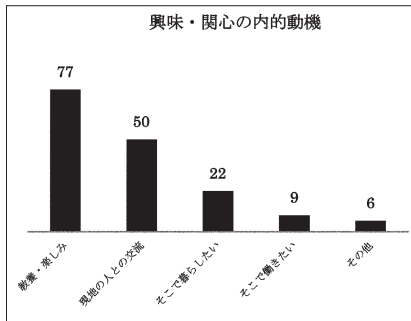
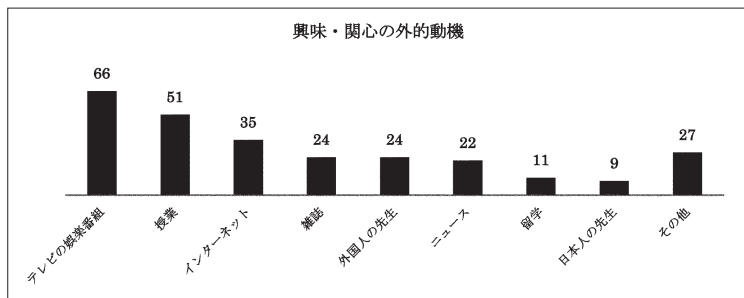


図 2



9 法務省によれば、政令指定都市の外国人登録者数割合は2010年現在、札幌市が最も低く0.5%である（札幌市市民まちづくり局の統計では2011年現在で外国人登録者数は9,546）。最も割合が高い大阪市は4.49%で、全国平均は1.76%である。

図3



また、85人中70人（82%）までが外国人とのコミュニケーションに対して自信がないと回答しており、その主たる理由として「英語が苦手だから」と答えている。この中には英語文化学科に所属する16人の学生のうちの12人（75%）も含まれる。こうした英語に対する苦手意識は、日々の訓練量あるいは実際の運用能力の高低にかかわらず多くの大学生が抱えているようであり、英語ならびに西洋諸国に対する強い憧れと劣等感（鈴木，1999）が、いぜん強く残っている可能性もある。

さらに、61人（72%）の参加者はコミュニケーションに対する苦手意識が個人の性格に起因するものと考えていた。具体的には自分が「臆病」、「恥ずかしがり屋」、「人と会うのが苦手」だからと回答している。英語の苦手意識と性格の問題は、別個の問題と考えられることもあるが、これら2つは連動している。というのも、コミュニケーションに対する怖れや不安は、むしろ社会・文化的要因だからである。短時間のうちに正答を期待する教育、暗示や余韻を好む発話や文章のスタイル、相対的に少ない会話量<sup>10</sup>などは、コミュニケーションをめぐる日本人の「性格」に深く影響を与えている。仮に、ある日本人が英語の高い語学能力を有していたとしても、そ

10 かつて Ishii と Kploff (1976) は、日本人の1日の会話量がアメリカ人のおよそ半分であることを示してみせた。

れが運用能力に直結しないことは周知の事実だし、また外国人とのコミュニケーションに対する自信につながるかどうかも疑問である。

図 4

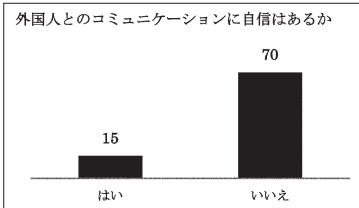
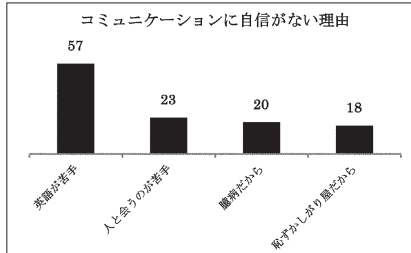


図 5



また、異文化コミュニケーションに必要な態度やスキルを聞いたところ（自由記述）、45人（53%）が「語学力（英語や相手の母語）」、37人（44%）が「文化理解」、36人（42%）が「積極性」にカテゴライズできる内容で回答していた。語学力や積極性への言及については、先述の通り、英語やコミュニケーション行為そのものに対する苦手意識が作用したものと思われる。一方、「文化理解」については、回答者の多くが自文化理解の重要性をあげており、ほぼ一年を通じた知的学習の成果として、異文化コミュニケーション初学者が陥りやすい「異」文化理解一辺倒からの進展が見られたといえる結果であった。

### 3.2 トレーニング後の意識

振り返りセッション終了後に、参加者に対して大きく2つの質問を行った。最初の質問では、多文化社会における異文化間のコミュニケーションで重要と思われる態度について答えてもらい、その後、トレーニングを通して学んだことや印象に残ったことなどを自由に書いてもらった。また、補足的な情報を得るため、振り返りセッション直前（専門家によるすべてのインタビュー終了直後）に、それぞれが感じた相手集団に対する「今、

ここ」の感情について多肢選択法を用いて聞いた。

### 3.2.1 異文化コミュニケーションで重要な態度について

ここでは、過去3年間257人（2012年：82人，2011年：72人，2009年：103人）<sup>11</sup>を対象に行った改変版 Outside Expert の参加者による感想から、多文化社会における異文化コミュニケーションの姿勢や態度に関する部分を抽出し、8つの項目に整理したものを呈示して、それらの中から最も重要と思われるものを2つ選んでもらう方法をとった。

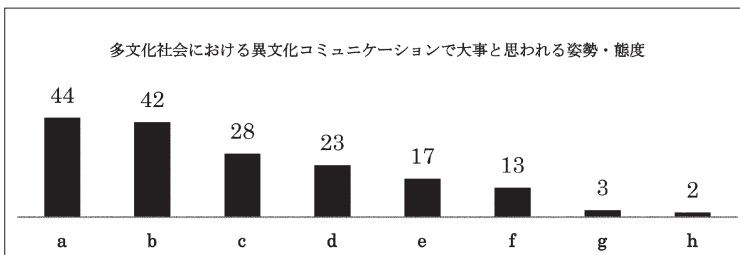
その結果、最も多くの参加者が選んだのは「相手の判断にステレオタイプを当てはめてはいけない」というもので、44人（52%）であった。また、「見えない文化側面に留意すること」は、42人（49%）である。「多数派は数の上でも少数派にストレスを与えている可能性に気づくこと」ならびに「未知の国を途上国と決めつけないこと」も、それぞれ28人（33%）と23人（27%）であった。逆に、「相互理解のために英語などの語学能力を磨くこと」については2人（2%）が選んだのみである。先述のようにトレーニング前の調査においては、異文化コミュニケーションに必要な態度やスキルとして半数以上が「語学力（英語やコミュニケーション相手の母語）」をあげていたことを考えると、この結果は改変版 Outside Expert の重要な成果の一側面を暗示しているといえる。すなわち、民族や人種、階層、権力などが錯綜する多文化社会における互恵的な異文化コミュニケーションのためには、言語以外にも重要ななにかが必要であるらしい、といった気づきをもたらされた可能性である。

---

11 2010年度分が欠落しているのは、筆者が在外研究で講義を担当しなかったためである。



図 6



- a. 相手の判断にステレオタイプを当てはめてはいけない
- b. 見えない文化側面に留意すること
- c. 多数派は数の上でも少数派にストレスを与えている可能性に気づくこと
- d. 未知の国を途上国と決めつけないこと
- e. 非言語行為に関心を寄せること
- f. 途上国に対して優越感をもつ傾向に気づくこと
- g. 通じ合えない相手を嫌わないこと
- h. 相互理解のために英語などの語学能力を磨くこと

### 3.2.2 参加者の感想

トレーニング後書いてもらった感想（自由記述）は、大きく4つの意味カテゴリーに分類することができた。それらは、1. 異文化に対する認知傾向、2. 多文化共生に関わる気づき、3. 道義的コミュニケーション欲求、4. 役割疲労である。

表 1 役割と感想

感想 役割	異文化に対する認知傾向			多文化共生に関わる気づき		道義的コミュニケーション欲求		役割疲労
	主観文化の軽視	見知らぬ文化に対する優越感	希薄な個人への関心	外国語習得のプロセス	数が与える圧力	反省	異文化コミュニケーションへの意気込み	
専門家	45 (66.2)	38 (55.9)	25 (36.8)	9 (13.2)	8 (11.8)	32 (47.1)	16 (23.5)	5 (7.4)
カンブーダ人	10 (58.8)	14 (82.4)	6 (35.3)	6 (35.3)	4 (23.5)	1 (5.9)	5 (29.4)	7 (41.2)

※（ ）内はそれぞれの役割総数に占める割合

「異文化に対する認知傾向」は、具体的には3つのサブカテゴリーから構成され、それらは、a. 主観文化の軽視、b. 見知らぬ文化に対する無意

識の優越感，そして，c. 希薄な個人への関心である。主観文化の軽視については55人（全体の65%：42人の専門家と13人のカンブーダ人），見聞きしたことのない国や文化に優越感をもちやすいこと，そしてそれはコミュニケーション行為に反映していることなどについて指摘する参加者は52人（全体の62%：39人の専門家と13人のカンブーダ人）であった。また，個人への関心の希薄さについては31人（全体の36%：26人の専門家と5人のカンブーダ人）が言及している。人は異文化接触において，言語や歴史的事実，習慣などに代表される客観文化に依存しがちで，相手の行為を深層で動かしている主観文化についてはむしろ無頓着であること，また，異文化への関心が政治・経済的国力に左右され，時に目の前の「個人」を見失なわせてしまうことに，多くの参加者が気づいたということになる。

#### 《参加者の感想》

##### a. 主観文化の軽視

- ・相手が私たちの座席の違いで対応を変えているなんて考えもしなかった。…異文化間でのコミュニケーションにおいて小さなc文化（主観文化）をみようとするのは大事だと思いました。（専門家）
- ・1年間勉強してきて，たくさんの気づきがあったはずなのに，思いっきり決めつけたりしてしまっていた。…表面だけのコミュニケーションをやめて，深いコミュニケーションを取るために見えないところをちゃんと見るようにすることが大切なんですね。（専門家）
- ・私も外国人に質問する時は「おスシは好きですか？」などしか思い浮かばなかった。主観文化の理解，とても重要だと感じました。（カンブーダ人）

##### b. 見知らぬ文化に対する無意識の優越感

- ・カンブーダ人のことをバカにしていたわけではないけど，頭の中で，「黒人で儀式とかあって，狩りをして・・・」というイメージしかなく，

それを基に質問してしまっていた。(専門家)

- ・同じ学校の生徒同士だったら対等な態度で接するのに、専門家と未知の国の人という設定だけでこんなにも優越感が、しかも無意識に出してしまうことがショックでした。これは異文化間だけでなく、普通の今の日常にもひそんでいるような気がします。(専門家)
- ・そして質問の内容も、かれらは私たちに対して原始人のイメージを持ちながらしてくるものだったので、嫌な気持ちになりました。自分の知らない国の人だとしても、まず相手に尊敬の念を持って話しかけるべきだと、このトレーニングをしてみても思いました。(カンブーダ人)

### c. 希薄な個人への関心

- ・国のこと、たとえば、食習慣や住環境などばかり聞きました。大切なのは、目の前の相手を尊重することだと思いました。異文化の相手を一人の個人として扱うということは、難しいと感じました。(専門家)
- ・3回ほど違うグループに行きましたが、どのグループも同じような質問(服や食など)ばかりで、しかも、すぐ違う話題に移ってしまうため、本当に自分の事を知る気があるのか不思議に思いました。(カンブーダ人)

「多文化共生に関わる気づき」についても、a. 外国語習得のプロセス、そしてb. 数を与える圧力と命名した2つのサブカテゴリーで構成されているようであった。一般に、言語習得のプロセスでは「聞く力」が「話す力」を先行し、それは母語であっても外国語であっても同様である。多くの場合、「話せない人は、聞いていない(理解していない)」のではないのであって、「ある程度聞いて(理解して)いるが、話せない」というジレンマの中にあるのである。専門家の質問に対してカンブーダ人が、「はい」と「いいえ」でしか答えられないというトレーニング上の言語制限は、参加者が大学生であれば、過去の語学学習や留学あるいは海外旅行での経験

と重ねあわせることができる。数的に多いとはいえないものの、15人（全体の18%：9人の専門家と6人のカンブーダ人）の参加者が、カンブーダ人の潜在的言語能力を無視して失礼な振る舞いをしてしまった（逆にカンブーダ人はそうした相手の言動に傷ついた）などの感想を寄せていたのは印象的なことであった。

また、改変版 Outside Expert ではホスト集団は専門家である。つまり、5～7人の専門家集団が1人のカンブーダ人を囲んで様々な質問をするわけだが、こうした状況は少数派を演じた参加者に心理的なストレスを与えることが多い。今回のトレーニングでは、12人（全体の14%：8人の専門家と4人のカンブーダ人）<sup>12</sup>の参加者が、数を与える圧力についてコメントしていた。

#### 《参加者の感想》

##### a. 外国語習得のプロセス

- ・短期研修で、英語はうまく話せないけれど、相手が何を言っているかはわかるという経験をしました。英語が下手なので相手にあきれられ、その相手が仲間と私について言っているとき、自分自身がとても悔しいし、恥ずかしいと思いました。これから外国の人と接するときには気をつけなければならないと、今日のトレーニングを通して気がつきました。（専門家）
- ・3人のバルーンバ人をインタビューして、先の人と違う答えが出てきたら、「えー!？」「ウソ!」とか相手が一人であることを無視して自分たちだけで盛り上がり、知らないうちに‘暴力’をふるっていた、と感じました。（専門家）

---

12 専門家を演じた参加者からもカンブーダ人に与えられたストレスについて言及があるのは、トレーニング後に行われる「振り返り」のセッションにおいて、カンブーダ人参加者の感想や意見が全体に共有されるからである。

- ・「はい」と「いいえ」しかいえない時に、専門家のみで話が盛りっているのを見て、とても孤立している気持ちになりました。(カンブーダ人)

#### b. 数が与える圧力

- ・相手の反応をよく見ないでどんどん質問して行ってしまった。相手は言葉では「はい」「いいえ」しか言わないとしても、それ以外の表情や視線などでも相手の気持ちを察することはできたとします。でも自分が多数派に属しているという安心感のためか、そういった点に無頓着になっていたと気づきました。もしこれが1対1のコミュニケーションなら、自分は違った対応をしていたらと思うました。(専門家)
- ・大人数に囲まれて、とても圧迫感があった。普通の口調なのに、まるで自分が尋問を受けているような気分になった。また、専門家同士で話したり笑ったりする場面が多く、相手の言語がわからなかったり、その話の内容が聞き取れなかったりすると、とても不快感があった。(カンブーダ人)

一方、こうした参加者の思いの先にあるのが、「道義的コミュニケーション欲求」である。この中には、a. 反省とb. 異文化コミュニケーションへの意気込みがあり、前者は33人（全体の39%：32人の専門家と1人のカンブーダ人）、後者は21人（全体の26%：17人の専門家と4人のカンブーダ人）が指摘した。途上国に対する優越感や否定的なステレオタイプがカンブーダ人を演じた参加者を不快にさせたこと、また、授業で学んだ知識を生かせなかったことなどを反省し、今後の異文化コミュニケーションに生かしたい、あるいはコミュニケーション技術を磨くためのヒントにしたいなどのようなコメントである。

トレーニングでは参加者一人ひとりが役割を担うとはいえ、専門家は普

段通りの自分を発揮しながらインタビューを行う。そのため、振り返りセッションで吐露されるカンブーダ人参加者の不快感やストレスに、かれらが率直に驚き、反省をうながされたことは自然の帰結であり、また、このトレーニングが、大多数をしめる専門家の役割を演じた参加者の感情に働きかけたことも示唆する。また、反省についてはカンブーダ人を演じた参加者1人からも寄せられたが、それは、自分自身が、もしも専門家としてトレーニングに参加していたなら同じようなことをしたであろうという、共感的推測による反省であった。

## 《参加者の感想》

### a. 反省

- ・自分も海外から来たので、他の国の人によくきかれる質問はなるべくさけるようにしたが、やはりトレーニングするときは無意識の優越感がちょいちょい出てきて、罪悪感をすごい持っています。(専門家)
- ・自分では気づいていないだけで、相手は傷ついていたかもしれないということに、終わってから気づきました。相手をステレオタイプ化して見てしまうのは、本当に失礼なことだと思った。(専門家)
- ・しかし、自分が専門家の立場であったなら、自分も同じようにバルーンバ人に嫌な思いをさせてしまったと思います。…普段の自分を振り返って後悔しています。(カンブーダ人)

### b. 異文化コミュニケーションへの意気込み

- ・思い返してみれば、相手の態度で気になる点もあったので、よく反応を見て、交流の仕方を判断しなければならないと思いました。実際、ステレオタイプを当てはめてしまっていたので、もし次にこのような機会があるときは、慎重に接しようと思います。(専門家)
- ・今日このトレーニングをして反省点を見つけることができたので、今後外国から来た方に会うときは、今日のトレーニングを思い出して、

良いコミュニケーションができればいいなと思いました。・・・異文化間だけでなく個々人との間でも、今までの授業やトレーニングを生かしたいです。(専門家)

- ・カンブーダ人になってみて、きっと自分も専門家になったらこうしてしまうだろうと思ったし、だから自分は今、嫌な気持なのだな、少しバカにされているな、と敏感に感じることができました。なので、今日感じたことをこれから先に生かしていきたいと思います。(カンブーダ人)

最後の「役割疲労」は、特定の役割を演じたことへの疲労感を表出したコメントである。全体で12人（14%：5人の専門家と7人のカンブーダ人）の参加者が疲労感を訴えており、また、カンブーダ人参加者の数が専門家の数を上回ったのは、このカテゴリーだけであった。カンブーダ人を演じた16人の参加者の約半数が疲れを訴えていた。「はい」と「いいえ」しかいえないトレーニング上の言語制約や2つの文化ルールは両方のグループメンバーに、また、インタビュー中に表出される専門家集団の優越感などは、特にカンブーダ人を演じた参加者にストレスを与え、疲れを感じさせたようであった。

#### 《参加者の感想》

- ・「はい」と「いいえ」で答える質問だけで相手を知るのは難しく大変だったし、途中からこちらの質問にも答えてくれなくなって、イライラして疲れた。(専門家)
- ・日本人は質問する時しかこちらに目を向けてくれず、つまらなくて、疲れました。(カンブーダ人)
- ・自分の気持ちを「はい」か「いいえ」だけで言うのはつらく、また、疲れました。(カンブーダ人)
- ・同じ質問を色々な人からされるのはとても苦痛だった。(カンブーダ人)

また、補足的に、参加者の感想と演じた役割の関連をみるために、上記8つのカテゴリーについて $\chi^2$ 検定を行ったところ、「見知らぬ文化に対する無意識の優越感」( $\chi^2=4.012, df=1, p<.05$ )、「外国語習得のプロセス」( $\chi^2=4.554, df=1, p<.05$ )、「反省」( $\chi^2=9.709, df=1, p<.01$ )、「役割疲労」( $\chi^2=12.832, df=1, p<.001$ )について有意差が認められた。すなわち、専門家を演じる参加者は、見知らぬ国や文化に対する優越感や相手の「聞く力」を軽んじてしまう傾向に対してより多く言及する傾向があるといえる。換言すれば、こうした自分自身の傾向に対する気づきが、かれらにより大きな心理的インパクトを与え、また、そのことによって反省がうながされた可能性があるといえよう。一方、そのちょうど裏側では、カンブーダ人を演じる参加者が、相手の態度や自らに課された言語制限などの条件によって、より強く疲労感を訴えやすくなるといえるだろう。

また、カンブーダ人の疲労を示すこの結果は、インタビュー直後の相手集団に対する「今、ここ」の感情について聞いた多肢選択法による調査<sup>13</sup>の結果とも連動していた。すなわち、相手に対してなんらかの否定感情をもったのはカンブーダ人を演じた参加者により多くみられたのである。相手に対して抱いた否定感情と演じた役割の関連性を、より詳しく見るために行った $\chi^2$ 検定では、不快感( $\chi^2=28.486, df=1, p<.01$ )、嫌悪感( $\chi^2=16.696, df=1, p<.01$ )、劣等感( $\chi^2=45.333, df=1, p<.001$ )、圧迫感( $\chi^2=18.214, df=1, p<.001$ )の4つについて有意差が認められた。この結果を見ると、改変版 Outside Expert では、カンブーダ人を演じる参加者は、専門家に比べて心理的なインパクトを受けやすいという解釈ができる。

---

13 親近感、安心感、不快感、嫌悪感など、それぞれ5つの肯定感情と否定感情を示し、複数回答を可として回答させた。なお、両グループともに相手に対する一定程度の肯定感情は示されたが、統計的な有意差は見られなかった。



表2 インタビュー直後の否定感情と役割

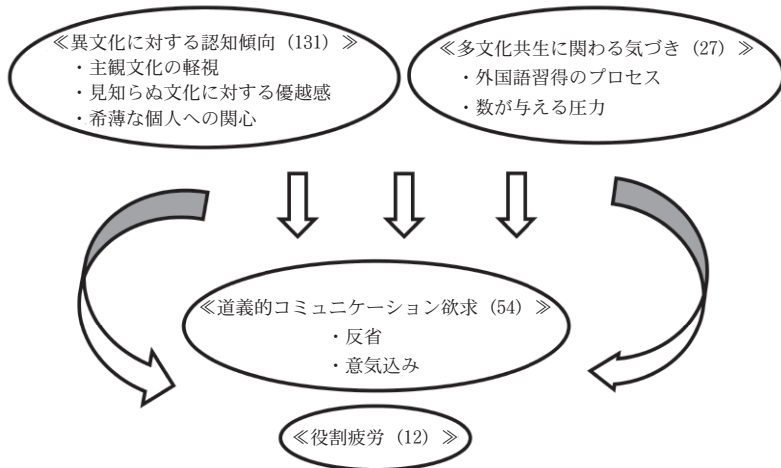
感情 役割	不快感	嫌悪感	違和感	劣等感	圧迫感
専門家	7 (10.3)	2 (3.0)	19 (27.9)	0 (0)	6 (9.0)
カンブーダ人	12 (70.6)	6 (35.3)	9 (52.9)	10 (58.8)	9 (53.0)

※ ( ) 内はそれぞれの役割総数に占める割合

人々の行為はあらゆる側面において文化的であるのに、日常生活の中ではそれがはっきり意識されることは少ない。トレーニングの調査結果全体を大きく振り返ると、改変版 Outside Expert は、皮相的(異)文化理解やパワーバランスの偏りによる優越感が、異文化間のコミュニケーションになんらかの悪影響を与える可能性に気づききっかけを、参加者に与えた可能性があるといえるだろう。

図7 トレーニングの感想：意味カテゴリーのマップ

\* ( ) の中の数値はそのカテゴリーに当てはまるコメントを書いた参加者の数



#### 4. おわりに

パワーバランスの偏りを内包する多文化社会において、公正で倫理的な異文化間のコミュニケーションを目指すことは、私たちが問い続けなくてはならない課題である。それは複雑で、時にデリケートだが、それゆえにこそ、異文化コミュニケーション研究やその教育が取り組むべき、意味ある課題である。トレーニングは必ずしも実践に結びつくことを保証するわけではないが、改変版 Outside Expert は、異文化コミュニケーションの初学者や異文化接触経験の少ない参加者にコミュニケーション上の文化的な気づきと、多文化共生について考えるきっかけを与えてくれる可能性があるといえるだろう。

一方、今回報告をおこなったトレーニングの参加者は女性だけであり、そこには決定的にジェンダーの偏りがある。改変版 Outside Expert に何らかの効果があるとしても、今回得られた知見は、トレーニング効果の一般化にむけた限定的推論といわざるを得ない。このトレーニングが潜在的にもつ多文化共生のための ICT としての魅力を生かしきるためにも、今後は多様な属性の参加者から幅広いデータを収集してその効果を分析する必要がある。

#### 引用文献

- 末田清子 (1994) 「コミュニケーション関連科目における異文化シミュレーション・ゲームの導入と学生によるその評価」『北星論集』 31: 129-157.
- 鈴木孝夫 (1999) 『日本人はなぜ英語ができないか』 岩波新書.
- 長谷川典子 (1993) 「異文化コミュニケーション教育へのアプローチ — 2つの体験学習を通して」『英学』 26: 11-22.
- 町恵理子 (1995) 「米国の異文化トレーニング研究から学ぶ — 異文化トレーニング・モデルの変遷と体験学習活動の組み入れ方」『麗澤レビュー』 1: 7-79.

- 森田ゆり (2000) 『多様性トレーニング・ガイド：人権啓発参加型学習の理論と実践』 解放社。
- 森山美雪 (2011) 「シュミレーションゲーム『バーンガ』の効果とその要因について 一多面的な状況に注目して」『異文化コミュニケーション』 14: 69-84.
- 八代京子他 (1998) 『異文化トレーニング』 三修社。
- 山本志都 (2001) 「異文化コミュニケーション教育におけるシミュレーション・ゲームの導入：『レインボー・ミッション』の実習と学習分析」『異文化コミュニケーション』 4: 91-113.
- Brislin, R. W. & T. Yoshida (1994). *Intercultural Communication Training: An Introduction*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Ishii, S. & D. Klopff (1976). A comparison of Communication Activities for Japanese and American Adults. *Eigo Tembo* (ELEC Bulletin), Spring.
- Mendenhall, M. et al. (2004). Evaluation Studies of Cross Cultural Training Programs: A Review of the Literature From 1988-2000. In Landis, D., J. Bennet & M. Bennett (Ed.). *Handbook of Intercultural Training, 3rd edition*. (pp.129-143). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Pedersen, P. (2000). *A Handbook For Developing Multicultural Awareness*. American Counselling Association.
- Wallace, J. A. (1993). Educational Values of Experiential Education. In G. Theodore (Ed.). *Beyond Experience: An Experiential Approach to Cross-Cultural Education*. (pp.11-16). Yarmouth, Maine: Intercultural Press.